

生命を見守る場 ～ふれジョブのご紹介～



はじめに、ふれジョブがどんな活動なのかを、簡単に説明しておきましょう。

ふれジョブは、2003年岡山県倉敷市で始められた「障害のある子どもたちの職業体験」です。県内では、須坂市、佐久地域、上小地域、長野市、茅野市の順に広がり始めています。活動には以下のような基本的な約束があります。

- ♪ 週に1回、1時間だけ。半年間続けます。
- ♪ 「ジョブサポーター」が付き添います。
- ♪ 職業訓練などの就労支援とは違います。
- ♪ 雇用関係や金銭のやり取りは伴いません。
- ♪ 不慮の事故に備え、保険に加入します。
- ♪ 月1回定例会を開き、子どもたちの活動を振り返り、認め合う時間を共有します。
- ♪ 組織の運営は、保護者が中心に進めます。

ふれジョブの本質を、私はこんな風に捉えています。
「生命を見守る場」

ある日あるとき、蛹が美しいチョウに変身する姿。
ある日あるとき、蕾がほころび、
美しい花が咲き開く姿。

日頃私たちは、こうした生命の営みやその変容を、目の当たりにすることなく、生活しているのではないのでしょうか？

気が付けば、チョウが飛んでいて、気が付けば、花が咲いている。でも、そこには必ずこうした生命の変容する瞬間があったに違いないのです。

ふれジョブは、こうした「生命を見守る場」なのだと思います。

以下に、佐久の地で咲いたたくさんの花の中から、一つの小さな花を紹介し、この不思議な魅力を孕んだ活動の本質について、私見を述べます。

H君

彼が、佐久市野沢地区で一番初めにこの活動に参加してくれました。お仕事は、ツルヤさんのバックヤード（野菜の準備をする場所）でした。

彼がいなければ、現在に続く「ふれジョブ☆のざわ」の活動は、ありませんでした。

活動が始まってからしばらくの間は、月に1回、保護者、受入れ企業、ジョブサポーター、学校の先生、地域の皆さんが彼一人を囲んで見守りながら、ゆっくりと着実に、組織ができ上がってゆきました。

半年間のジョブを終えた最後の日、店長さんと記念写真に収まった彼の顔には、半年間休むことなくやり遂げた達成感と自信が満ち溢れています。



彼は当時、中学校の特別支援学級で学んでいました。日頃、自分からお話することのないお子さんですが、自分の意思はしっかりと持っていて、初めての作業にも常に前向きに、積極的に取り組みました。定例会のたびに店長さんが毎回ご参加くださり、直接本人の様子を報告していただきましたが、実は、始めからこんなに打ち解けていらしたわけではありません。

回を重ねる内に、店長さんの中で彼の姿を通して、

この活動の意味が理解され、おのずからお顔が優しくなってゆかれたように感じました。

そして最後の定例会。半年の間、彼のお仕事体験に付き添ったあるジョブサポーターさんが、彼に向かって深々と頭をたれながら、こう言われました。

「本当にありがとう。人が生きてゆく上で、大切なことを、教えてもらいました」

その時、そこに居合わせた全員が、彼女とまったく同じ気持ちを共有していました。

定例会には、本当に不思議な力があります。それはきっと、年齢や立場を超えて人が人として、平等にお互いを認め合う自由な場が成立しているからでしょう。

彼の他に、現時点でのべ30名ほどの子どもたちが自分の暮らす地域でふれジョブに参加してきました。

現在、佐久地域では、佐久市、小諸市、軽井沢町、御代田町の2市2町、合計6ヶ所でふれジョブの組織が活動しています。

誕生した順に、ふれジョブあさま、ふれジョブ☆のざわ、ふれジョブチャンスこもろ、ふれジョブ軽井沢、ふれジョブなかごみ、ふれジョブみよたです。

詳しくは、「全国ふれジョブ連絡協議会」のホームページから「ふれジョブin さく連絡協議会」のブログに入って検索してください。

ふれジョブinさく連絡協議会のシンボル、リアンちゃん（フランス語で絆の意味）です。よろしくね！

（協力：ドロップレット・プロジェクト）



3年前、私たちが初めて考案者の西幸代先生をお迎えして開催したシンポジウムで、この活動の中心的な理念について、以下のように示していただきました。

ひとをどのように見るかを問うこと。

自分の中にある差別意識に気づくこと。

ひととしてかわるとき「支援する」「支援される」の関係は行ったり来たりする。

障害ということばでかかわれば「支援される」だけ。

「インクルージョン」と「ふれジョブ」

インクルージョン（包み込むこと・包含すること・仲間に加えること）

最近いろいろな場面で使われるこの言葉は、社会のあり方を見直す意味で、とても大切な言葉です。

ところで、「私たちはあなたたちを包み込みます」という場合、包み込む「私たち」とは誰でしょうか？

そして、どこに立っているのでしょうか？

包み込まれる「あなたたち」とは誰なのでしょう？ 彼らはどこに居るのでしょうか？

私たちは、これらのことを丁寧に確認する必要があるように思います。そこに、真の意味での「平等」が成立しているか否かが、何よりも大切だからです。

月に一回行われる定例会で車座になって過ごすとき、私は『お互いが「含み合いながら」存在している』という自然な一体感に立ち環るのです。

あの3月11日以降、私たちは動物や植物も含め、私たちが元来、生命体として含み合って共存しているのだ、という謙虚な自己認識を取り戻す必要に迫られているのではないのでしょうか？

これまで私たちの社会を牽引してきたのは、「数字」「効率」「お金」を絶対とする価値観でした。人間は「勝ち組」と「負け組」に分けられます。

私たちは、これから先もこうした価値観に基づいた生活を続けてゆけるのでしょうか？

この本質的な問いを私たちに投げかけているのが、他にもない「障害のある子どもたち」です。

社会を構成する組織の歯車となって働くという役割とは別に、人間には立ち止まって社会の在り様を問い直す責任があるのです。

「包み込む」と「含み合う」。ふれジョブは、これら二つの言葉の意味を私たちに問いかけています。

あらためて今、西先生の言われる『人にものを考えさせるジョブ』という言葉を味わってみましょう。

ふれジョブの「ふれ」は英語で書くと pre = (～の前) という接頭辞ですが、西先生はあえて PURE (ピュア：英語で純粋) にローマ字読みで「ふれ」をかけておられます。つまりそれこそが、真の仕事、なのです。

■ 宮尾 彰

ふれジョブinさく連絡協議会